

ボルヘスと時間——文学と歴史哲学についての一考察

石井 登

0. はじめに

米■のラテンアメリカ文学者であるシーモア・メントンは、その著書である『ラテンアメリカの新歴史小説』によって、新歴史小説というジャンルを提示した。彼はラテンアメリカの歴史を扱った新しい小説作品の中で、ある種の特徴を見出し、そこでこの新たなジャンルを生み出したのである。彼はその特徴を六つの点から定義している。それは要約すると次のようになる。

1. ボルヘスによって知られるようになった、過去・現在・未来のすべての時間的区切りに適用でき、その3つの哲学的アイデアを例証するのに、歴史的時間を用いて模倣的に再創造することに関わる、様々な段階での下位的配置。
2. 省略、誇張、時代錯誤を通じて歴史を優雅に歪曲すること。
3. 主人公として有名な歴史上の人物を利用すること。
4. メタフィクション、または語り手が彼自身のテキストの創作過程について言及しているもの。
5. 間テキスト性。
6. 対話、カーニバル、パロディや異書記法といったバフチンの概念。² (斜体原文)

これらの定義によって、マリオ・バルガス＝リョサの『世界終末戦争』やアベル・ボッセの『楽園の犬』、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『迷宮の将軍』、カルロス・フエンテスの『闘い』などを論じている。この定義の中で、一番目の項目である「ボルヘスによって知られるようになった、過去・現在・未来のすべての時間的区切りに適用でき、その3つの哲学的アイデアを例証するのに、歴史的時間を用いて模倣的に再創造する

ことに関わる、様々な段階での下位的配置。」への関心から本論文の考察は始まる。

ボルヘスの作品では永遠や過去・現在・未来の同時性、時間論など、非常に難解な時間についての記述が多い。また「円環の時間」や「円環の歴史」という考え方もボルヘスの作品を理解する上での中心的な視点となっているのではなかろうか。そこで本論ではボルヘスの時間について書かれた代表的な記述を検討し、ボルヘスの時間についての「哲学的アイデア」と思われるものを示してみたい。次に歴史哲学と語りの問題について考える。語りの問題は恐らく常に時間との関係を持つと思われるためである。そして、歴史哲学とボルヘスのテーマを併置し、ボルヘスの文学と哲学の違いについて、筆者の考えを示してみたい。

本論ではボルヘスの『伝奇集』に収められている「トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス」、『不死の人』に収められている「エル・アレフ」、そして『永遠の歴史』の中から時間についての記述を取り上げる。歴史哲学については、ヘーゲル、アーサー・C・ダントの考察を検討する。また語りと時間の問題からポール・リクールの著書を用いて検討を加えたい。メントンは先述の定義の中でボルヘスについて「哲学的」と評したが、ボルヘスの時間についてのアイデアが、やはり文学的であることについて考えてみたいと思う。

1. ボルヘスの「トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス」、『永遠の歴史』、「エル・アレフ」

カルロス・フエンテスの『すばらしい新世界』は1990年に出版された評論集である。この評論集でフエンテスは小説の時空間について論じている。彼はこのテーマについて、まずジャンバッティスタ・ヴィーコの時間をデカルトの進歩主義的時間に反旗を翻すものとし、人文主義的歴史、螺旋的な時間を提示するものとした。続いてジェイムズ・ジョイスの名を挙げている。ジョイスはヴィーコを西洋の近代文学へ持ち込んだとされる。ミハイル・バフチンから言語の多様性、対話について指摘し、ついにラテンア

メリカではボルヘスの名を挙げる。ボルヘスの図書館から読者による無限の読みの可能性、そして多様性へと至る考察を行っている。ここで述べられる多様性は、宇宙的空間と歴史的時間における読者の読みの多様性という視点である。また、ボルヘス研究者の内田兆史はボルヘスの図書館と宇宙観について論じているが、彼の引用するウンベルト・エーコの指摘にもまた、図書館と読者という視点が用いられている。そこではカオスという言葉も使われる。カオスとコスモスという対立概念、無秩序と秩序での無秩序への指向、そこに無限の多様性を読み取ることができよう。

これらの視点は、ボルヘスを《永遠》、あるいは無時間というキーワードから論じているように思われる。一方、ボルヘスが時間という観点から論じられる際、《円環の歴史》あるいは《円環》という言葉が多用されているように感じられる。ボルヘスの『永遠の歴史』には「循環説」や「円環的時間」というエッセイがあり、これらのタイトルは一見、時間は円環として繰り返されることを示しているように思える。しかし、ボルヘスの作品が描いているのは円環の時間だけではない。この「円環的時間」で指摘されているのは現在と過去・未来の類似性、あるいは同時性、そして《人間存在が一定不変の量である》³ということである。この現在、過去、未来の關係に注目しながら、ボルヘスの作品を読みたい。

『永遠の歴史』はボルヘスの時間に関する考察を知る上で、重要な書である。この作品ではボルヘスが考える時間についての問題を示す箇所を数多く見出すことができる。それは《円環》というよりは《同時性》である。

多くの人間が構想した様々な永遠一唯名論の永遠、イレナエウスの永遠、プラトンの永遠―はどれをとっても、過去、現在、未来の機械的な集成ではない。それはもっと単純な、そしてもっと摩訶不思議なもの、それら三つの時間の同時的存在なのである。⁴ (下線は引用者)

ここでは過去、現在、未来という三つの時間の同時的存在について述べている。《永遠》という言葉が用いられているが、その永遠が時間の認識の三つの要素である過去・

現在・未来という視点へと分解され、さらにそれが、同時的存在、つまり一つの要素へと還元されることについて指摘している。また「機械的集成」とは、一般的な時間についての認識、あるいは言葉として、時間の連続性についての問題を示す部分であろう。さらに次の箇所でも、この同時的存在と思われる部分を見出すことができる。

むしろ永遠という語を複数にすべきかもしれない。二つの永遠の一方は、被造物の物静かな原型たちに異様なまでの愛をこめて焦がれる實在論的永遠であり、他方は、原型の真実性を否定し、宇宙の細部に至るまで一瞬のうちに集約しようと欲する唯名論的永遠である。⁵ (下線は引用者)

ここでは永遠について「一瞬のうちに集約」という表現を用いている。永遠というものを時間的継続性の観点から捉えるのではなく、むしろ一点へと集約している。いわば無時間性である。一方で、先に挙げた円環的時間について考えると、時間はやはり線的（直線的か螺旋（螺線）的かは問わず）であり、繰り返されるもの、継続されるものと考えられる。環の中で元々いた場所へ戻るという意味では反復される時間と考えられるかもしれない。しかし、ボルヘスはそれを否定している。

それは相似でも反復でもなく、まさに同じ当のものなのである。時間とは、もしわれわれにその実体を直感することができるとすれば、一つの幻想である。見かけ上のきのうという日の一瞬と、見かけ上のきょうという日の一瞬との間には何の相違もなく、両者は不可分のものであるという一事だけで、時間を解体するには十分であろう。⁶ (いずれも下線は引用者)

時間を「相似でも反復でもな」いもの、幻想であり、具体的な「きのう」と「きょう」の一瞬（とは、点としての時間であろう）は、相違のないものとしている。ここから時間の継続性・連続性についての疑問を呈することになっている。恐らく、もし人が現在というつかみどころのない一瞬を捉えられるとするならば、その点としての現在に違い

はないということであろうか。一種の無時間性とも言えるだろう。しかし、別の視点から現在について考えると、時間における過去・未来の現在性という点も挙げられるかもしれない。

ボルヘスの『伝奇集』に収められている短篇「トレーン、ウクパール、オルビス・テルティウス」では、ウクパールという国の文学がムレイナスとトレーンという二つの架空の土地にまつわるものであるとされる。そしてこの短篇ではトレーンという地についての説明が続くが、その中で、トレーンの哲学者たちが考える、時間についての問題を示す箇所を見出すことができる。

現在の瞬間とさまざまな過去のそれとの不可能な総和を予定するからだ。複数の
「過去のそれ」というのも、別の不可能な操作を前提とするので正しくない……。
 トレーンの学派のあるものは時間さえ否定する。現在は無限であり、未来は現在の願望としてしか現実性を持たず、過去も現在の記憶としてしか現実性を持たない、と推論する。べつの学派は、すべての時間はすでに経過しており、われわれの生は、ある回復不可能な過程の、おそらく欺瞞にみちた不完全な記憶、あるいは淡い余映である、と断定する。さらに別の学派は、宇宙の歴史——そしてそのなかでのわれわれの生と、われわれの生のきわめて微少な細部——は、ある卑賤な神が悪魔と意を通じるために書いた文章であるという。ある学派は、宇宙がくらべられるとすれば、それはあらゆる記号に価値があるわけではなくて、三百夜ごとに生じるもののみに真実があるような暗号法である、という。さらにある学派は、ここで眠っているながら、われわれは別の場所で目醒めており、かくて一人の人間は二人の人間である、と断定する。⁷ (下線は引用者)

下線の部分は、現在という時間についての認識について述べている箇所であろう。トレーンの哲学者という架空の存在を用いて、複数の時間の捉え方を例示しているが、中でもこの現在を起点とした時間の捉え方については、先にメントンによって哲学的イデアと指摘されたボルヘスと哲学を繋ぐ重要な部分である。過去と未来という時間が、現

在を起点として認識されうることを示している。しかし、ボルヘスは哲学を論じている訳ではない。あくまで詩人・作家として、この時間についての認識を提示しているのである。『永遠の歴史』で書かれた時間の「同時的存在」とは、むしろ彼の幻想的なフィクションである「エル・アレフ」に描かれるアレフという時空間の一点での存在へと繋がるだろう。

「エル・アレフ」は、ボルヘスが友人のカルロス・アルヘンティノ・ダネリ⁸の家でアレフという不思議な存在を目撃するフィクションである。このアレフという「思慮を絶した世界」は、二、三センチの小さな球体であるが、その中に宇宙ともいえる空間とあらゆる時間を内包したものであった。そしてその中にボルヘスが見たものが列挙される。

⁸ ボルヘスは、メタフィクション的に考えを巡らせ、このアレフという存在について説明する。そしてその存在が持つ問題について記述する箇所に、時間について考察する部分がある。

中心的问题是、いぜんとして解決されていない。つまり、たとえ部分的にもせよ、無限の全体を列挙するという問題だ。この巨大な瞬間のなかに、わたしは楽しい行為、または残酷な行為を幾百万となく見た。そのすべてが重なりあうわけでも、透けて見えるわけでもなく、同じ一点を占めているという事実ほど、わたしを驚かせたものはなかった。わたしの目が見たものは、同時に存在していたのだ。わたしの記述したものが連続的に存在するかのように見えるのは、もともと言語というものがそういうものだからである。⁹

時空間が多にして一である驚異的な存在としてのアレフの中では、すべてが「同時に存在」している。過去・現在・未来が一点として存在し、そのすべてを同時に見ることができるのである。さらに、ボルヘスはこの引用部分で言語の特徴としての連続性というものを指摘している。一般的に時間が連続的、継続的に考えられるものであることと、この言語の連続性との関連について示唆するものであると思われる。ここに詩人・作家としての感性のようなものを読み取ることができるだろう。

これまで挙げてきたボルヘスの諸作品で描かれた時間についての認識で、その中心にあるのは、いずれも時間の同時性であったが、メントンの指摘する「哲学的イデア」というものより、筆者にはむしろ、ボルヘスのオブセッションのようなものが感じられる。時間について哲学的に考察した結果、得られた結論というのではなく、永遠や時間というものが一点であるという感覚を表現するため、これらの作品を描いてきたのだということである。詩人・作家としてのボルヘスの芸術家としての感性、そして神秘主義者とも言えるような、謎めいたものを捉える感覚こそが、ボルヘス的と言われるものの一つの形なのではないだろうか。また、これは私たちがボルヘスを幻想文学として受容する理由かもしれない。

2. 歴史哲学について

ボルヘスの作品では、時間についてこれまで挙げたような時間認識を描いている一方で、例えば歴史哲学の領域では、どのような考察が行われているかについて考えてみたい。ボルヘスは、『永遠の歴史』に収録される「円環的時間」の中で、マルクス・アウレリウスの『自省録』、バートランド・ラッセルの『意味と真理の探求』などを引用している。哲学的考察を彼の時間についての感覚を補強するために用いていると思われる。1940 年に書かれたとするラッセルの考察とギリシア時代のマルクス・アウレリウスが併置されていることで、時間についての考察が、長い間行われてきたことを示している。ボルヘスが引用するマルクス・アウレリウスの『自省録』の文を全文引用してみよう。

たとえ汝が三千年、いや三万年生きようとも、誰もいま現に生きている生を失うことはなく、いま失う生以外の生を生きることもないということを銘記せよ。もっとも長い生涯と、もっとも短い生涯とは、それゆえ同等のものだ。現在は万人のものである。死ぬことは現在を失うことであり、現在は瞬時に過ぎ去ってしまう。なんぴとも過去や未来を失うことはない。なんぴとにとっても、自分の所

有していないものを奪われることはありえないからである。万物は流転し、同じ軌道を繰り返し廻っているのであり、観者にとってはそれは百年見ていようと二百年見ていようと永遠に見ていようと同じであることを銘記せよ。¹⁰

そしてボルヘスはこの引用から「過去と未来の実在性を否定している」¹¹との考えを導きだす。この引用が指摘しているのは、恐らく時間の主観性の問題であり、個の時間についての認識の在り方である。個々の人間が、その生にしたがって時間との関係を持ち、それによって時間を認識していくという在り方であると思われる。その個々の時間の総体が歴史となる。歴史哲学とはこのような時間認識の総体について考察するものであり、この章では特にヘーゲル、アーサー・C・ダント、ポール・リクールの考察を取り上げ、ボルヘスが描いたものとの関係について考えてみたい。

ヘーゲルの『歴史哲学講義』は歴史哲学の考察としては古典的なものであると考えられるが、その本の中で、まず歴史を捉えるにあたって、三つの考え方を挙げている。まず一つ目は、a「事実そのままの歴史」であり、次に b「反省を加えた歴史」、そして最後が c「哲学的な歴史」である。まず a「事実そのままの歴史」について、その特徴について述べる部分を引用する。

事実そのままの歴史をつくりあげる民族は、自分の状態と自分のめざすところを自覚した民族です。目の前に見えている現実のほうが、過去の現実よりも確固たる土台をなすのであって、過去の現実を土壌とする伝説やつくり話は、みずからを民族として明確に自覚するにいたった民族にとっては、もはや歴史の名にあたいしないのです。¹² (下線は引用者)

このように「事実そのままの歴史」では、現在の現実と過去の現実を対立させた上で、現在を起点とした歴史認識を提示している。これは時間に関する認識の萌芽的な捉え方であろう。ボルヘスの考える過去・現在・未来の同時性や主観的時間という部分に繋がる、現在を起点とした時間認識に関わるものと思われるが、その過去（ここでは伝説や

つくり話) という原型を土台とするのではなく、現在見えている世界をそのまま記述することに価値を置くという時間の対立的構図の部分で、ボルヘスのものとは異なるように思われる。

次に b「反省を加えた歴史」について説明している部分を引用してみたい。ヘーゲルはこの「反省を加えた歴史」を 4 つの分類に分けている。それは、1. 民族あるいは国土、世界の全体を概観する歴史、あるいは通史とよばれるもの、2. 実用的な歴史、3. 批評を主眼とする歴史、4. 個別の分野をあつかっているとわかる歴史、であるとする。そして、この反省とは解釈を加えたものと捉えることができるだろう。

君主や政治家や民衆にむかって、歴史の経験に学ぶべきだ、と説く人はよくいますが、経験と歴史が教えてくれるのは、民衆や政府が歴史からなにかを学ぶといったことは一度たりともなく、歴史からひきだされた教訓にしたがって行動したことなどまったくなく、ということです。それぞれの時代はそれぞれに固有の条件のもとに独自の状況を形成するのであって、是非善悪の決定も状況のなかからおこなわれなければならないし、また、それ以外に決定のしようがない。¹³ (下線は引用者)

これは 2. 実用的な歴史について論じた部分であるが、何か文学的な興味を惹く内容である。この考察部分は、歴史が反復されるという視点ではなく、時代的条件によって、その解釈も異なるという視点である。また、通史と呼ばれる歴史が、個の主観的時間としてよりも、国家によって作られるという前提があることを考慮に入れておかなければならない。ボルヘスの「トレーン、ウクパール、オルビス・テルティウス」における時間についての記述がウクパールという国で書かれたトレーンの哲学者たちの時間の解釈であったことを思い起こさせる。そして次の引用部分も、歴史の解釈という視点、つまり個の時間と全体の時間についての問題を孕んでいる。

一分野の歴史が一般的な視点を追求するところまで来ると、その視点が真に一

般的な視点であれば、それは、たんに外面をなぞる糸を、外面的な秩序を、しめすだけでなく、事件や行為の内面にあつてそれらを導く魂そのものをあらわすことが、注意されねばなりません。¹⁴ (下線は引用者)

「事実そのままの歴史」が、伝説やつくり話といった、過去の出来事のエッセンスを抽出した語りから脱し、解釈を伴わない記述に重きを置いているように見えるのに対し、「反省を加えた歴史」では、「一般的視点」、歴史が現在を起点とした解釈によって語られるという考え方を示している。事実とは目に見えるもの、または理解しうるもののみであるということを考えると、「事実そのままの歴史」の素朴さが際立つ。そして、この歴史を物語る上での c「哲学的な歴史」が問題となってくる。

哲学が歴史におもむく際にたずさえてくる唯一の思想は、単純な理性の思想、つまり、理性が世界を支配し、したがって、世界の歴史も理性的に進行する、という思想です。¹⁵ (下線は引用者)

歴史が解釈によって語られるとき、そこには理性が必要となる。この理性による解釈によって歴史哲学は世界を捉える上で真理を得ることができるとする。ここでヘーゲルは哲学の領域へ踏み入ることになる。恐らくヘーゲル（つまり哲学者）とボルヘス（詩人・作家）を隔てるのはこの部分であろう。ヘーゲルが理性という考え方によって真理を探究するのに対し、前章で挙げたボルヘスの描く時間の同時性は、果たして真理の探究であろうか。自らの直感を、哲学を利用して記述するのがボルヘスのスタイルであり、彼の文学的関心やオブセッションがその根源にあるように筆者には感じられるのである。

しかし、ヘーゲルは、真理の探究という哲学的考察から、現在についてボルヘスと類似した考えを示している。次の引用箇所は、ヘーゲルが過去の事実である歴史を考察する際にも現在を問題と捉えることを述べるものである。

わたしたちにとって、精神の理念こそが重要であり、世界史上の一切がもっぱら精神のあらわれと見なされるべきだとすれば、過去の事実をたどるに際しても、その過去がどんなに偉大であろうと、私たちは現在にかかわるものだけを問題としなければならない。というのも、真理の探究をこころざす哲学は永遠の現在にかかわるものだからです。哲学にとっては、うしなわれていく過去などは一つもない。理念は目の前にあり、精神は不死であって、すぎさることも、いまだあらわれざることもなく、その本質からして、いまあるものだからです。¹⁶ (斜体は原文傍点、下線は引用者)

ヘーゲルもまた、「永遠の現在」という言葉を用い、哲学の思考もまた、現在という時間に関わるものであるとしている。ボルヘスの文学と哲学の奇妙な接点をここに見出すことができるだろう。そしてこれがボルヘスについて、メントンが哲学的アイデアと考えた理由であろう。

歴史哲学者のアーサー・C・ダントは、『物語としての歴史』という著作において、歴史と語りについての論考を行っている。彼は「私たちが通常世界を思考する方法がいかに歴史的であるかは計り知れない。」¹⁷と語り、哲学と歴史を結びつける。そして歴史哲学を定義する。

歴史と歴史哲学との差異は、後者が前者とはちがって詳細な事実発見にもとづいた上で、さらに説明を加えるという点にあるのではない。なぜならこうした説明は、歴史も歴史哲学も等しく行うからである。それゆえに歴史哲学者のつくり出す説明が、歴史の領域を越えて歴史自身が果たす機能以上のことを成し遂げようとすれば、それはまったく別種の説明とならざるをえない。そしてもしかりにその説明が科学理論と少しでも似通っていれば、それは全く別種の説明なのだと考えても当然だろう。なぜなら科学理論は表面的には他のジャンルに属し、通常の一般的な歴史考証の基準とは別の基準をもっているように見えるからである。しかしながら、歴史哲学が一般的な科学理論とはほとんど似ても似つかないという

ところに難点が生ずる。歴史哲学がもしなにかと似ているとすれば、それは歴史説明では通常行われないこと、つまり未来にある種の要請をするという点を除いて、むしろ典型的な歴史説明に類似しているのである。¹⁸

このように、歴史哲学の定義を未来という時間との関係を用いて説明している。また、ここで歴史哲学と科学の問題が示されるが、この歴史哲学と科学の違いについて、解釈という行為の有無を前者と後者を分ける違いであるとしている。解釈、すなわち意味の概念と言うべきものを用いることによって、歴史哲学が科学理論ではなく歴史の側に付く。しかしながら歴史学者と異なるのは、歴史哲学者の歴史の射程が過去・現在・未来のすべての時間、歴史の全体構造を捉えようとしている点であり、この点にその特殊性を見出している。ここで過去・現在・未来という時間の三つの概念が揃う。

さらにダントは遠い星の爆発がわれわれに知覚される例を挙げ、「出来事が知覚されるには時間—空間の範囲が存在するということである。」¹⁹と述べ、その空間性についても指摘している。この空間と知覚の問題が、時間についての解釈の問題と関わってくる。星の爆発はわれわれがそれを知覚するより、さらに過去に起こっているということである。それを知覚する時間と星の爆発の時間は同じ時間ではない。時間を知覚する上で、起こる出来事については過去、あるいは目の前の現在からしか見出すことができないと彼は考える。そして過去の経験からしか未来は予測できないという点が条件文という形で表されることから想定している。ここで、時間と語りの問題が導きだされる。『物語としての歴史』という主題の前提となる論点である。

「シーザーは死んだ」と「シーザーは死んだ」とは、一方が検証されてしまうと、同じ文ではないのである。それでも私たちは、これらがいずれも同じ文の言明であり、この同じ文は常に同じ意味をもつと言いたいのはたしかである。またこれらは異なった言明をつくり出すための、同じ文の異なった用法だといったところで、さして助けにはならない。なぜならそれらの異なった言明は、もし一方が実際に検証されたり、両者が異なった経験によって検証されたりすれば、決して同

じことを意味しないからである。²⁰

二つの文がその文との関係性から検証（あるいは解釈）した場合、二つの文が別の意味を持って立ち現れることを述べている。これこそが、先述のカルロス・フエンテスや内田兆史がボルヘスの図書館から導いた無限の読みの可能性、そして多様性へと繋がるものであろう。「シーザーは死んだ」という非常に短い文章でさえ、解釈によって歴史的にもなるし、多様性を持つものになりうるのである。

ダントはさらに語りと時制とそれが示すものについての考察も行っている。先の引用で挙げた「シーザーの死」という出来事について、出来事が起こった時間と、その言語的表現の関係を例示するのに、二つの文を使って、それが孕む時間についての問題を述べている。一つ目の文は A, 「シーザーはローマで紀元前四四年に死ぬ。」という現在形の文。そして二つ目は B, 「もし、紀元前四四年ローマ、という経験を人がもつとすれば、その人はシーザーが死ぬという経験を得るだろう。」という条件文である。

文はいつ発せられたのか、それはなにか過去、現在、あるいは未来のことについて述べているのかがわからないということである。[中略] 私が興味があるのは、ある所定の出来事が過去であるという事実をいかにして経験的な術語に翻訳するかということである。[中略] 時間—空間の位置の指示と、どのようにしてそうした術語に翻訳できるかを問うこととは、まったく別の問題である。というのも、このように翻訳された時間—空間の位置が過去、現在、または未来のいずれであるかわからなくても、のちに述べたほうの作業は遂行できただろうからである。

21

歴史は語られるときに時間の翻訳という形式を用いて行われる。そしてその時制は必ずしも現実の時間の流れの連続性に合わせて行われるものではないということがここで示されているのである。ここで筆者はこの歴史哲学の哲学としての論考に文学的なものを感じずにはいられない。哲学における言語の時制についての考察が語りという視点

から考えられるとき、文学を考える上での批評理論へと接近しているように思われる。

ポール・リクールは物語論の研究者であるが、『時間と物語』において、歴史をどのように語るかについて考察している。この物語言語について取り上げることもここでは有意義であると思われる。言葉による表現が時間をどのように捉えるかを知る上で重要であろう。リクールもまた、時間を表現する言葉である過去・現在・未来について、その認識を言葉の次元から考えている。

懐疑主義的な論法はよく知られている。すなわち、時間は存在をもたない、未来はまだないし、過去はもうないし、現在はとどまっていないからである。それでいてわれわれはまるで時間が存在をもっているように話す。未来の事からはやがてあるだろうし、過去の事からはすでにあつたし、現在の事からは過ぎ去る、とわれわれは言う。過ぎ去ることさえ、無ではない。注目すべきことに、非存在のテーゼへの対抗を暫定的に支えているのは言葉の慣用なのである。われわれは時間について語り、しかも時間について、理にかなって語る。²² (下線は引用者)

これはアウグスティヌスについての論考であるが、ここで懐疑論的な論法として紹介される過去・現在・未来についての考え方もまた、まるでトレーンの哲学者のようである。この三つの言葉、そしてその存在は言葉の慣用によって意味を持ちうる。やはり言葉と意味、そしてそれが指し示すものの関係が問題となっている。言葉の理解によって、この三つの時間は経験的に理解することができるとしている。そして時間を測定するにはどのように考えるのか二つの動詞を用いて示している。

重要な動詞はもはや過ぎ去る (transire) ではなく、とどまる (manet) となる。この意味で、二つの謎——存在／非存在の謎と、広がりのないものを測定する謎——は同時に解決される。²³

懐疑論によって否定された、時間と言葉の慣用によって存在する過去の現在性という

時間の問題を、人間の精神という視点を用いて考察している。これは人間が感じる時間の長さの捉え方についての問題であり、リクールはそれをこの二つの動詞から捉えようとしているのである。また、永遠という言葉については無時間性を持つものとして考える一方、時間経験を時間性として、それを深めることの重要性を唱え、次のように述べている。

現代の物語理論の主要な傾向は——歴史記述においても、物語論においても——物語を「脱年代順化」することであるというのがほんとうであるなら、時間の直線的表象に対するたたかいは必ずしも物語を「論理化」することだけを結果としてめざすのではなく、むしろ物語の時間性を深めることをめざすのである。^{クロノロジー}年代順または年代記録は、その唯一の対立者として、法則またはモデルの^{アхроノミー}無時間性をもつのではない。その真の対立者は時間性そのものである。²⁴

ボルヘスの場合、無時間性とは「永遠」、そして時間性を深めるものとしての「過去・現在・未来の同時性」であろう。リクールはそれを言葉の慣用、つまり語りによるものとしていると言えるだろう。そして、このリクールの論考が哲学ではなく、物語論としてのものである点が、この引用から明らかになっている。時間がどのように存在するのかという真理を追求する哲学的問題、つまり時間論を文学、あるいは語られるものに援用することによって、語られるものの時間性を考えることの重要性を示しているのである。

本論で挙げたボルヘスの作品（もちろんこれだけではないが）は、いずれもこのリクールの挙げる時間性の深化というものを見出すことができた。この章で挙げてきた時間と永遠、言葉と時間、時間と人間の精神（あるいは主観的時間）などはいずれもボルヘスの作品から読み込めるテーマであった。この章で挙げた論考が、ボルヘスのオブセッションや文学的直感から書かれたと思われる作品とこのような相関を持ちうるとするならば、やはり驚異的である。もちろんボルヘスがブッキッシュな人であり、とりわけ古典に通じていることは周知の事実ではあるが、にもかかわらず、時間論の現代的な主

題を内包する彼の作品には、恐るべき深みが垣間みられる。ここに詩人・作家としてのボルヘスの芸術家としての姿を見出すことができるのではないだろうか。

3. おわりに

現代において時間論について考えるとき、マクタガートの実在しない時間について考察や、ベルクソン、ドゥルーズの同時性のパラドクス、科学哲学の論考、例えば郡司ペギオ幸夫の A 系列と B 系列についての考察などは外すことはできないのではないかと考えられる。しかし本論については時間が限られている問題もあり、残念ながらそこまで踏み込むことはできなかった。しかし、ボルヘスの描く時間を科学哲学で分解してみたいという衝動に駆られたことは何度もあった。ボルヘスの時間についての記述が持つ幻想性が、このような感情を抱かせるのではないかと思われる。この欲望は機会があれば次に譲って、本論を締めくくりたい。

先に挙げたジル・ドゥルーズは『ベルクソンの哲学』というベルクソンについての論説書で、その時間論について考察している。ドゥルーズの《差異》についての思想が時間に適用されるとともに、彼の哲学の発展の中で重要な位置を占めるものとされる著書である。この書には次のような文がある。

創造的感情は、知性のなかでの直感の発生である。したがって、もしも人間が開かれた創造的全体性に到達するとすれば、それは瞑想することによってであるよりも、むしろ行動し、創造することによってである。哲学そのもののなかに、まだあまりにも多くのにせの瞑想がある。すべてはあたかも知性がすでに感情に、したがって直感に浸透されてはいるが、この感情に対応して創造できるほど十分には浸透されていないかのように進行する。また、哲学者たちよりもはるかに遠いところにある偉大な精神の持ち主は、芸術家と神秘主義者（少なくとも、ベルクソンがすべてがありあまる活動性であり、作用であり、創造であるとして記述

するキリスト教神秘主義者たち) である。結局、あらゆる創造を行ない、力動的であるとともに、適切でもある表現を作り出すのは神秘主義者である。²⁵ (下線は引用者)

ドゥルーズは芸術家や神秘主義者の創造性を賞賛している。筆者にはこの文がまさにボルヘスに宛てて書かれたもののよう感じられた。これまで見てきたように、時間認識という哲学的問題に対してもまた、創造者としてその直感に基づく創作を行ってきたと思われるボルヘスは、やはり神秘性を纏っている。ボルヘスの作品は幻想文学、いわゆる「ためらい」と「適応」の文学というジャンルから見られることが多いが、本論において扱った哲学的な時間についても、決定不可能と思われる「ためらい」的な要素を見出すことができるだろう。時間の在り方を示す「永遠」、「歴史」という二つの言葉からなる『永遠の歴史』というタイトルの撞着語法がすでに、読者を不安定な時間認識へと導いている。たとえ科学哲学によって時間の姿、そして永遠の姿が解明されたとしても、ボルヘスの作品はさらなる「ためらい」を内包し続けるのではないだろうか。ボルヘスの文学を読む楽しみとは、常にこのような期待を伴うものであると筆者には思われる。

註

1. 本論文は 2012 年 11 月 7 日、東京大学にて行われたボルヘス会大会での発表を基にしたものである。引用については既訳があるものは既訳を用い、無いものは筆者によるものである。また、敬称は省略している。

2. Menton. *Latin American New Historical Novels*. pp.22-24.

3. Borges. 'Historia de la eternidad' en *Obras completas I*. p.396. " [...] la existencia del hombre es una cantidad constante, [...]".

4. 同. p.354. "Ninguna de las varias eternidades que planearon los hombres—la del nominalismo, la de Ireneo, la de Platón—es una agregación mecánica del pasado, del presente y del porvenir. Es una cosa más sencilla y más mágica: es la simultaneidad de esos tiempos".

5. 同. p.363. “De las eternidades, mejor, [...] uno, el realista, que anhela con extraño amor los quietos arquetipos de las criaturas; otro, el nominalista, que niega la verdad de los arquetipos y quiere congregar en un segundo los detalles del universo”.

6. 同. p.366. “es, sin parecidos ni repeticiones, la misma. El tiempo, si podemos intuir esa identidad, es una delusión: la indiferencia e inseparabilidad de un momento de su aparente ayer y otro de su aparente hoy, bastan para integrarlo”.

7. ‘Ficciones’ en *Obras completas I*. pp.436-437. “porque supone la imposible adición del instante presente y de los pretéritos. Tampoco es lícito el plural “los pretéritos”, porque supone otra operación imposible... Una de las escuelas de Tlön llega a negar el tiempo: razona que el presente es indefinido, que el futuro no tiene realidad sino como esperanza presente, que el pasado no tiene realidad sino como recuerdo presente. Otra escuela declara que ha transcurrido ya *todo el tiempo* y que nuestra vida es apenas el recuerdo o reflejo crepuscular, y sin duda falseado y mutilado, de un proceso irrecuperable. Otra, que la historia del universo—y en ella nuestras vidas y el más tenue detalle de nuestras vidas—es la escritura que produce un dios subalterno para entenderse con un demonio. Otra, que el universo es comparable a esas criptografías en las que no velan todos los símbolos y que sólo es verdad lo que sucede cada trescientas noches. Otra, que mientras dormimos aquí, estamos despiertos en otro lado y que así cada hombre es dos hombres”.

8. ボルヘスは自らが見たものを列挙するが、ボルヘスが描けるのは、ボルヘスがそれと認識できるもののみとなるだろう。

9. Borges. ‘El Aleph’ en *Obras completas I*. pp.624-625. “el problema central es irresoluble: la enumeración, siquiera parcial, de un conjunto infinito. En ese instante gigantesco, he visto millones de actos deleitables o atroces; ninguno me asombró como el hecho de que todos ocuparan el mismo punto, sin superposición y sin transparencia. Lo que vieron mis ojos fue simultáneo: lo que transcribiré, sucesivo, porque el lenguaje lo es”.

10. マルクス・アウレリウス『自省録』pp.31-32. ボルヘス『永遠の歴史』pp.123-124. 訳文は『永遠の歴史』のものを用いた。

11. Borges. 'Historia de la eternidad' en *Obras completas I*. p.395. "negar la realidad del pasado y del porvenir".
12. ヘーゲル『歴史哲学講義』p.12.
13. 同. pp.18-19.
14. 同. pp.21-22.
15. 同. p.24.
16. 同. p.134.
17. デント『物語としての歴史』p.5.
18. 同. p.19.
19. 同. p.57.
20. 同. pp.62-63.
21. 同. p.68.
22. リクール『時間と物語 I』p.10.
23. 同. p.28.
24. 同. p.45.
25. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』p.125.

参考文献

- BORGES, JORGE LUIS. 'El Aleph' en *Obras completas I*. Buenos Aires: Emecé. 1996. 邦訳:『不死の人』土岐恒二訳 白水社 1985.
- . 'Ficciones' en *Obras completas I*. Buenos Aires: Emecé. 1996. 邦訳:『伝奇集』鼓直訳 岩波書店 1993.
- . 'Historia de la eternidad' en *Obras completas I*. Buenos Aires: Emecé. 1996. 邦訳:『永遠の歴史』土岐恒二訳 筑摩書房 2001.
- FUENTES, CARLOS. *Valiente mundo nuevo, épica utopía y mito en la novela hispanoamericana*. (1-ed). México: Fondo de cultura económica. 1990.
- MENTON, SEYMOUR. *Latin America's New Historical Novel*. Austin: University of Texas Press,

1993.

内田兆史「《バベルの図書館》とボルヘスの宇宙観」『迷宮 No.3』ボルヘス会 2003.

ダント、アーサー・C『物語としての歴史』河本英夫訳 国文社 1989.

ドゥルーズ、ジル『ベルクソンの哲学』宇波彰訳 法政大学出版局 1974.

ヘーゲル、ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ『歴史哲学講義（上）』長谷川宏
訳 岩波書店 1994.

マルクス・アウレリウス『自省録』神谷美恵子訳 岩波書店 1956.

リクール、ポール『物語と時間 I』久米博訳 新曜社 1987.